

第 部 部 局 編

人文学部

第1章 富山高等学校

人文学部の前身は、大正13(1924)年設置の県立富山高等学校にまでさかのぼる。富山高等学校は、高等教育機関の充実を望む県民の厚い要望に応えて、富山県上新川郡東岩瀬町の馬場家の篤志による多額の寄付によって設立され、多くの人材を生み出した。

以下、『富山大学十五年史』によりながら、その設立、昭和19(1944)年官立(国立)移管、昭和24(1949)年文理学部設置までの経緯を述べる。

第1節 富山高等学校の創設

1 馬場家の篤志

当時富山県における高等教育機関は、富山薬学専門学校のみで、全国的に見ても、また近隣の石川、新潟両県に比べても、決定的に立ち遅れていた。そのために進学希望者は、富山を離れる必要があり、経済的な問題から断念しなければならない場合もあった。工業県として経済的にも発展しつつあった富山県にも高等教育機関設置を望む県民の希望は強かった。

大正12(1923)年は、皇太子(昭和天皇)の成婚が予定された年であったが、この「慶事」を機として、郷土の教育事業に私財の一部を寄付して、県民の希望を実現すべく、立ち上がったのが、富山県上新川郡東岩瀬町の富豪馬場正治の親権者馬場はる子であった。馬場家では、かねてから富山県に7年制高等学校の創設を考えていたが、たまたま皇太子の成婚を迎えようとするに当たり、実行を決意したのである。

馬場家は、同年5月15日、次の寄付願を県に寄せた。

寄付願

皇太子殿下今秋御婚儀被為挙候皇室ノ御繁栄ハ勿論国家ノ一大御慶事無涯奉祝賀侯就テ八御成婚

奉祝記念事業トシテ七年制高等学校設立願上度金壹百万円也ヲ寄付シ以テ君国報恩ノ微意奉表致度存候間願意御許容被下可然御施設被度御願申上侯也

大正12年5月15日

富山県上新川郡東岩瀬町

馬場正治親権者馬場はる子

富山県知事 伊東喜八郎殿

県は、この寄付願を受けて、7年制高等学校創設の計画に着手したが、その予算は不足していた。これを補い、また教官の海外留学基金10万円などを設けるため、馬場家に34万円の追加寄付を要請したが、馬場家は快諾した。

県は、同年7月臨時県会を招集、富山高等学校の創設を議決した。併せて県会はこの日、馬場家に対する感謝文も議決、これを馬場家に呈した。

やがて富山高等学校の敷地は、富山県上新川郡大広田村蓮町の17,400坪を当てることに決定した。大正12年10月12日付をもって、文部省は富山高等学校設立を認可、これを受けて県は10月18日、富山県令第63号をもって富山高等学校の学則を公布、11月15日には、元学習院教授南日恒太郎に富山高等学校校長事務取扱を委嘱、創立事務所を富山県庁内に置いた。12月5日、文部大臣は南日恒太郎の校長就任を承認した。

富山高等学校は、中学校にあたる4年課程の尋常科、その後3年過程の高等科をおく、中高一貫の教育体制をとった。

2 開校

富山高等学校の開校1年目の仮校舎は、東岩瀬町立尋常小学校の校舎の一部を借りたものであった。大正13(1924)年4月15日、尋常科生80名を迎えて、4月18日授業を開始した。

開校を祝して、同年6月10日馬場はるが富山高等

学校に寄付したのがヘルン文庫であった。ラフカディオ・ハーンの蔵書（洋書2,071冊、和漢書376冊）からなり、ハーンが晩年心血をそそいだ『神国日本』の手書原稿1,200枚も含まれていた。

このヘルン文庫が富山高等学校に蔵されることになった経緯はつぎのとおりである。南日恒太郎は、令弟である女子学習院教授田部隆次から、ハーンの遺族がこの蔵書をどこかに寄付したい希望を有していることを聞いた。田部はハーンの高弟であった。この時、富山高等学校長に就任することにほとんど決まっていた南日はこれを富山高等学校の象徴となる存在として譲り受けたいという熱意を抱き、馬場はる子の出資を仰ぎ、田部の斡旋によってこの文庫を入手した。南日は、このヘルン文庫を通じて、優れた教官を招聘し、富山を日本における文化の中心地にしたいと考えていたという。このヘルン文庫は、後に富山大学に引き継がれ、現在はラフカディオ・ハーンのコレクションとして世界的に知られた存在となっている。

大正14（1925）年3月、校舎の本館教室、生徒控所、講堂が完成、仮校舎を引き払ってその新校舎へ移転した。この年には、尋常科第2回生80名、新たに高等科生として、文科甲類・同乙類・理科甲類・同乙類の各20名が入学した。

その後、昭和2（1927）年の新学期においては、尋常科および高等科の各学年が充足され、昭和3（1928）年3月、第1回卒業生を送り出した。

新校舎の全工事が竣工したのは昭和3（1928）年だった。この間、設備の不備を補う必要を生じていたが、馬場家はこの状況に応じて、再度の追加寄付16万円を寄せた。馬場家の寄付総額は150万円に達した。

3 馬場家のこと

馬場家は、富山県上新川郡東岩瀬町において代々廻船業を営み、また大地主として、北陸屈指の富豪であった。明治以後、第5世馬場道久は、外国航路も開拓して事業を発展させ、地方の金融のため銀行を興し、また中央の事業界にも力を尽くした。明治23（1890）年の帝国議会開設時には、富山県の多額納税者として貴族院議員に選ばれていた。道久は実

子がなく、第6世道久は、馬場家の分家より入り跡をついで、事業を発展させた。道久と結婚したのがはる（富山県泊町の旧家小沢家の娘）であった。はるが37歳のとき、道久が40歳という若さで病を得て逝去した。はるは、この不幸に堪え、先代の遺業をますます発展させたばかりでなく、代々社会公共事業につくした遺志を体し、教育事業のために巨万の富を寄付した。そのはるの数多い業績のうち、特筆すべきものが富山高等学校の創設費の寄付であった。この功により、大正13（1924）年紺綬褒章を受け、後従六位に叙せられた。戦後、富山市は、はるを名誉市民に推戴し敬意を表することになった。富山高等学校においても、はるに対する敬愛の念は深く、数千の卒業生の母と慕われることになり、はるの像が造られた。現在の人文学部長室には、そのはるの像が引き継がれ、また富山高等学校跡地の馬場記念公園にもはるの像が建てられている。

4 開校式のころ

昭和3（1928）年3月、第1回の卒業式を行い、校舎諸施設も完成、秋には開校の武典をあげた。だが、その間の7月20日、南日校長死去という不幸な事態をむかえた。当時富山高等学校では1学期の試験が終わると休暇に入り、東岩瀬の海岸で、職員生徒が水泳を行うのが恒例となっていたが、南日校長は、その水泳中、心臓麻痺のために逝去したのである。南日校長の葬儀は、7月24日、校葬として、富山市外山室村長江の南日邸において、全校職員生徒の哀悼のうちに行われた。

南日恒太郎は、ほとんど独学で英語を学び、学習院教授としても信望のあついであった。初代富山高等学校長に就任以来、物心両面にわたって富山高等学校を軌道にのせることに熱意を傾け、その実を充分にあげていた。また、その篤実高潔な人格は、職員生徒の心服するところとなっていた。

南日校長の死去と同時に校長事務取扱を命ぜられた柴山槐郎は、8月16日第2代校長に就任した。

10月17日、富山高等学校の開校式が行われた。大正13（1924）年の開校以来すでに4年、2回の卒業生を出し、尋常科の第1期生もすでに高等科に進学、学校の外形内容ともに整備、充実されていた。この

開校式は、富山高等学校創設期のしめくりであるとともに、次の発展時代の開幕でもあった。

第2節 教育と学生生活

1 教育方針

戦前、高等学校の卒業生のほとんどが東京帝国大学をはじめとする大学に入学することができた。明治期とは異なり、その数を増していたが、戦前昭和期の大学卒業者は、まだ社会各方面の指導的立場に立つ存在として見なされていた。したがって、当時の高等学校は、そういったエリートの人材養成の場であると考えられていたが、富山高等学校も、その例外ではなく、学問の攻究とともに、高邁な精神と潤達な気宇をもった人格を作り上げることを教育精神の限目とした。そのために南日校長が、校訓として高唱、力説に努めたのが、反省、進取、協調だった。在校生の気風は、他の高等学校と同様に将来を担う気概に満ち、校友会の各部の建設と活動、また寮生活の上にと、活気に充ち溢れたものだった。

富山高等学校は、その第1期生から東京帝国大学をはじめとする各帝国大学に多くの入学生を送り出して、他の伝統ある高等学校と比較しても遜色がなく、時にこれを凌駕して世の注目するところとなったという。

2 校友会の活動と寮の生活

校友会には総務、講演、図書雑誌、芸術、音楽、柔道、剣道、弓道、陸上競技、蹴球、水泳、山岳スキー、野球、庭球、卓球、端艇、乗馬の各部をおいた。昭和2(1927)年には高等科の応援団も組織された。これらの各部の活動は、年とともに盛んとなり、武道その他の運動部においては、全国大会において優勝、もしくは準優勝して富山高等学校の名を高めた。

富山高等学校の寮は、大正13(1924)年6月、東岩瀬町の南端、大島宗左衛門門所有の建物を借り受け、まず尋常科生徒の寄宿舎として約30名収容の三計塾が設けられた。だが、この塾は、その後種々の事情

により昭和3年度に廃止された。

高等科生のための青冥寮は、大正15年秋、校内敷地に設けられ、自宅通学以外の高等科1年生は、原則としてこの寄宿舎に入り、毎年約100名の寮生があった。浮華軽薄をいやしみ、敝衣破帽を誇り、高唱放歌しつつ大道を潤歩するバンカラの気風は、明治以降の高等学校生のものであった。その一方で、将来を担う有為の人材として、洗練された高い人格を涵養するという自律心をもって寮生活を送るのが常だった。青冥寮生も、このような明治以来の高等学校生の伝統を受け継いでいた。したがって、寮に対する監督指導の機関として寮務課がおかれ、寄宿舎細則も決められていたが、運営のほとんどは、寮生の自治にまかされた。青冥寮生の特色は、素朴にして堅実なところにあったという。

3 思想問題など

大正の終わりから昭和初期にかけて、マルクス主義思想が急激に台頭したが、社会科学の研究は高等学校生徒の心をとらえ、これらの生徒を中心とするいわゆる思想問題が全国の高等学校にあいついで起こるようになった。富山高等学校でも、昭和2(1927)年、「社会科学研究会」が組織され、校友会総務部の主導権を握った。昭和3(1928)年3月、治安維持法によって全国の共産党員およびその同調者の一斉検挙が行われたが(3・15事件)、富山高等学校でも検挙者がでた。学校当局は、この内「指導者」5名の生徒に対し論旨退学の処分をし、高等科生に対し「社会科学研究会」の解散および社会問題に関する研究禁止を命じた。しかしその後、秘密裏に「社会科学研究会」は再建され、校内運動の展開とともに校外運動にも進出した。昭和4(1929)年4月、再び全国の共産党員およびその同調者の一斉検挙が行われたが(4・16事件)、富山高等学校でも10数名の生徒が警察署に検束された。学校は、これらの中心となった2名に退学を命じたが、その内の1名が家庭に帰って自殺した。この報が伝わると、生徒の間に動揺が広がった。さらに翌昭和5(1930)年3月、ある教授の転任問題に関して、学校当局の態度が初代南日校長の教育方針を破壊するものであるとして、卒業生も富山を訪れて、在校生と共に柴

山校長に対する排斥運動となった。この運動はついに高等科の同盟休校に発展、高等科全生徒は6月14日学校を出て東水橋町のある寺に籠城した。この事件は、父兄側の調停、卒業生の説得により17日、籠城が解かれ盟休団は解散したが、翌昭和6（1931）年3月、この責任をとって柴山校長が退職した。4月、新任の蜷川龍夫が校長に就任した後も、「校風刷新」の気運が続き、この間「左傾的生徒」の動きは潜行的に拡大していった。

昭和7（1932）年2月、26名の生徒が警察署に検束されて、そういった動きが表面化することになった。この活動は、昭和6（1931）年秋より活発となり、活動各班の組織を作り、その上に自治学生会を作って一般生徒を吸収、校友会の改革、教練急課、演習不参加など校内活動を展開していくことを目的としていた。この大量の検束を受け、学校当局は、放校2名、諭旨退学11名、停学37名などの処分を下した。だが学生の運動は続き、翌昭和8（1933）年にも放校4名、諭旨退学2名の処分者を出した。その後は、警察の徹底的な取り締まりもあって、全国の運動と同様に富山高等学校における学生の活動も下火となっていった。

第3節 戦時下の富山高等学校

昭和12（1937）年蘆溝橋事件後、日中戦争が本格化、政府は戦時体制を強化していったが、高等教育もそこに組み込まれていった。この間、昭和15（1940）年4月、蜷川校長が退職、後任の校長事務取扱に前第八高等学校長小松原隆二が就き、昭和16（1941）年11月、小松原の退職とともに教頭成田秀三が校長に就任した。

1 集団勤労作業

昭和13（1938）年9月文部省は、集団的勤労作業運動実施に関する通牒を中等学校以上に発して、生徒が農事・軍需品などに関する作業に従事することを定めた。やがてこの作業は正課に準ずるものとなり、さらに、1年のうち30日以内の日数は、授業を廃して作業に充当するように強化した。これによ

て富山高等学校でも、昭和13（1938）年以後、毎年、農場の作業、植林の集団作業を実施した。昭和16（1941）年8月、文部省はさらに学徒を労務動員するために学校報国隊の編成を命じた。これを受けて、富山高等学校でも、同年9月16日、職員生徒で報国隊が結成された。同年後半には、国民勤労報国協力令が公布され、太平洋戦争の開戦を迎えた。昭和17（1942）年以後、富山高等学校の報国隊は県下の農村などに出勤するようになった。昭和19（1944）年はじめ、緊急学徒勤労動員方策要綱の閣議決定があり、勤労即教育の趣旨に徹して一層動員が強化され、ついには通年動員が行われるようになった。このために、各学年が県下の各種の工場に動員され、昭和20（1945）年には全校生徒が学校を離れて工場の勤労に従事することになった。

2 教授要綱の改訂

昭和17年度の新学年から高等学校の教授要綱が改訂され、第1学年の授業は新要綱によって実施された。まず科目の名称は、文科では、道義・古典・哲理・経国・体練、理科では人文・博物などとなった。このように学科の名称を変更したばかりでなく、内容も、それぞれ日本の精神を強調し、またその意味から、授業は知識の伝達に止まらず、修練を重んじることになった。集団勤労作業などについては、これに評価を与え、修練点・勤労成績をつけることになった。

3 修業年限の短縮

昭和18（1943）年、政府は教育に関する戦時非常措置方策を決定、高等教育機関の修業年限を短縮した。これにより高等学校の修業年限も2年半となり、そのため昭和18年度における文科理科の第3学年生に対する卒業式は繰り上げられて、9月7日に行われた。その後、敗戦まで、卒業式はこの時期に行われることになった。

4 学徒出陣

昭和18（1943）年9月、文科系学生の兵役延期が

廃止された。この措置により学業の中途において入営することになった富山高等学校生徒は、文科2年で22名、文科1年で9名を数えた。この年の9月、修業年限短縮によって文科および理科の第3学年生が卒業した後、11月13日、この出陣学徒のために壮行式が挙げられた。これらの生徒は学校に在籍のまま、入営地に向かった。

5 官立(国立)移管

富山高等学校は、公立高等学校として富山県の財政によってまかなわれてきたが、創立後年を経るにしたがい、ますます予算は苦しいものとなってきた。昭和7(1934)年以降、時の蜷川校長は、ここでも馬場家に要請して、10年間にわたり、年1万円の出資を仰いで教官の優遇費に当てていた。

この財政不足が改善されないまま、太平洋戦争に突入した昭和17(1942)年からは、政府の命令により、理科系生徒を大幅に増募しなければならなくなった。その生徒定員の増加に応じて教官定員増が必要となったが、県の負担が増大し、教官に対して十分な待遇を保証できない等の問題を生じた。この問題を機に、かねて県民からも要望の強かった富山高等学校の官立への移管が、いっそう強く要請されることになった。「時局の要請するところ」と、文部省はこれをいれ、富山高等学校の官立移管が実現することになった。なお、この実現については、富山県出身で、文部省にあって早くから富山高等学校のために配慮するところのあった、先の文部次官赤間信義の助力によるところが大きかったという。

昭和18(1943)年8月30日、勅令第249号をもって文部省直轄学校の官制の改正が行われ、これによって4月1日より新たに国立の3年制の富山高等学校が新設され、従来のは富山県立高等学校と改称して新設のものに併置することになった。県立高等学校は、在籍中の尋常科生徒を収容するもので、その生徒の卒業と共に廃止することになっていた。尋常科生の募集は昭和18年度で中止され、県立高等学校は、昭和21(1946)年廃校となった。

新設の富山高等学校は、初年度においては文科甲類40、同乙類40、理科甲類80、同乙類80を定員とする第1学年生徒が入学した。なお、このなかに尋常

科修了生を含むことは従来通りであった。

なお、新しい富山高等学校のクラス編成は、文科が甲類・乙類各々1組、理科が甲類・乙類各々2組となった。理科の生徒は、「時局の要請」により、前年の2倍となったが、戦争の進行により、理科生徒をさらに増募する国の方針がとられ、昭和19年度および昭和20年度、理科甲類3組、同乙類2組の生徒が入学した。

第4節 敗戦後の富山高等学校

1 勤労働員引揚式

昭和20(1945)年8月2日、米軍の空襲によって富山市の市街地は壊滅的な被害を受けた。幸いにも、富山高等学校は罹災を免れたが、職員の大部分と富山市在住の生徒が罹災した上、生徒の出動していた工場も罹災し、あるいは機能を失った。富山市は全市域の大半が焦土となって8月15日の敗戦を迎えた。

富山高等学校は、8月18日、講堂において勤労働員学徒引揚式を行った。

2 復員学生

戦争終結の秋、学校は平常にたちもどって学期を開いた。敗戦とともに陸海軍の諸学校は廃止されたので、政府はそれら諸学校の生徒を、一般の高等学校、専門学校などに受け入れる措置を講じた。富山高等学校は、これらの志望生徒に対し10月19日に転入試験を行った上で、141名に対して文理各学年に編入を許可した。さきに出陣学徒として軍に入った富山高等学校の生徒も逐次帰校した。編入生徒の取り扱いには翌年においても若干あり、昭和21(1946)年秋には、外地引揚の生徒に対しても若干名の転入を許可した。昭和20(1945)年11月には成田秀三が学校長の任を辞し、あらたに清水虎雄が校長に就任、後に文理学部設置にあたり初代学部長となる。

3 白線浪人

戦後の高等学校における困難な問題は卒業生の大学進入に関するものであった。政府は戦争の末期において、各地の高等学校の理科生を著しく増員したが、これら理科生の進学に当たって、大学の受け入れ態勢は極めて不十分であった。大学の収容人員は従来より増員するものが少なく、そのためにいわゆる白線浪人の数が、戦後にわかに増大することになった。

富山高等学校においては、昭和18(1943)年から昭和20(1945)年の各年度において大幅の増募が実施され、昭和21年度からは理科の甲類・乙類は各2クラスと縮められたが、いわゆる帝国大学など大学の定員がそのまま据え置かれたことで、卒業生の大学への入学は困難となった。私立大学に進むものも多く、また戦後の経済事情により、大学進学を断念しなければならないものも少なくなかった。昭和24(1949)年、新制大学が設置される際にも、この白線浪人の解決は大きな問題であった。昭和24(1949)年を迎えたとき、全国で7,000人、旧制高等学校3年生を合わせれば、その数1万人に及んでいたという。

新制大学設置は、この白線浪人の解消策として期待されていた。だが大学側には、新制大学の新鮮さを守らなければならない、といった空気も強かった。しかし、各大学は、できうる限りの入学および編入学の処置をとり、富山大学文理学部でも白線浪人を受け入れる方向で対応した。昭和24(1949)年10月27日、富山大学で中部地区の旧制高校長会議が開催されたが、白線浪人の問題が中心の話題であった。

文理学部は、昭和25年度、募集人員約50~60名として、旧制高校、高専および師範の卒業生を対象に2年生(専門課程)への編入学試験を実施、試験科目は、文学科、経済学科が外国語と論文、理学科が外国語と数学生物物理化学の内1科目、あわせて高校卒業試験を参考にして選抜が実施された。なお、

この白線浪人向けの編入試験は翌昭和26年度(募集人員文学科4名、経済学科10名、理科6名の計20名)まで行われた。

4 理乙コース

旧制を引き継ぎ、新制大学になっても医学部進学は、昭和29年度までは、2年終了時までには修得単位を履修して、専門課程に進むシステムであった。旧制富山高等学校では、理科乙類がこれに相当していたが、文理学部でも、医学部進学希望者に対するカリキュラムを設けていた。昭和29年度までは、特別に理乙コース(定員20名)を設置していた。

昭和25(1950)年3月、富山高等学校の廃止以降、医学部受験は退学が条件となったが、不合格だった在籍学生のために、理学科への2年次編入の処置をとった。なお昭和33年度まで、こういった医学部進学希望者3名が文理学部に在籍していた。

5 富山高等学校の廃止

富山高等学校をはじめ富山県における五つの高等専門学校を包括した富山大学の設立は、昭和24(1949)年3月18日認可され、5月31日公布法律第150号国立学校設置法によって正式に発足した。同時に富山高等学校は「富山大学富山高等学校」と改称された。

富山高等学校の昭和23年度入学生は1年修了をもって新制大学の入学資格を与えられ、富山大学をはじめとして全国の大学に進学していった。富山高等学校としての最後の卒業式は、昭和25(1950)年3月に行われ、3月31日、法律第51号国立学校設置法の一部を改正する法律によって富山高等学校は廃止された。大正13(1924)年4月、開校以来27年間、3,300人の卒業生を世に送り、多くの人材を生み出した富山高等学校は、ここにその輝かしい歴史を閉じた。